

カロッサの作品における「愛」について

著者	丹治 寿太郎
雑誌名	東北ドイツ文学研究
巻	3
ページ	40-49
発行年	1959
URL	http://hdl.handle.net/10097/00133438

カロッサの作品における

「愛」について

丹 治 寿 太 郎

Carossa の作品、すくなくとも彼の自伝的作品の中での男女間の愛の占める領域はきわめてすくない。なかでも彼の自伝的作品の中核である „Führung und Geleit“ においては友愛とその友愛にもとづく精神的共同体という思想は再三再四強調されているが、それに反して、男女間の愛、すなわち恋愛についてはほとんど言及されていない。これは彼が愛において精神的愛を強調し、そして愛の真の姿、愛の永遠性を精神愛に求めた詩人であること、すなわち愛の結晶を、男女間の愛を超越した人間の友愛に求めた詩人であることを意味するものである。しかし Carossa は、男女間の愛、恋愛をどのようにみているか、また恋愛にどのような態度をとっているかという問題にふれていきたいと思う。問題になる主要な作品は、„Die Schicksale Doktor Bürgers“ „Der Arzt Gion“ „Geheimnisse des reifen Lebens“である。

I

まずここで問題になる作品は、Albert Soergel が<二十世紀の „Werther“>⁽¹⁾と云った彼の処女作 „Die Schicksale Doktor Bürgers“ である。すなわち „Die Flucht ; Ein Gedicht aus dem Nachlass Doktor Bürgers“ の扉において<そうだ、いま私の心にもっとも近いのは、私が救うことのできないだろうということを知っている絶望の人達だ。>⁽²⁾ といっているごとく、医師という市民的職業について一青年が、他人の苦しみをまともに自分の良心にひきうけ、かつ、自分の無力に絶望し、ついに死をえらぶのであるが、これは „Führung und Geleit“ において<あの Doktor Bürger の素描、それにおいて私は、多分潜在的な没落によつて現実の没落に一步先んずるために、私の最初の医師時代の諸体験を描写するというよりは、むしろ暗示したのだった。>⁽³⁾ と云っているように、彼の最初の数年間の医師体験を敘述したものである。

Bürger の性格は前にも述べたように、他人の苦悩と共に苦悩し、かつ自分の無力に苦しまざるを得ないという過剰な良心、父親からゆずりうけた結核の特効薬ピロカルピンと、父親の名声からくる負担、医師という仕事を天が彼に授けた使命と信じ、それに自分自身の生命を賭けている有為な若い医師ではあるが、はげしい感受性、感情に支配

(1) Albert Soergel ; Dichter aus deutschen Volkstum, Dichtung und Dichter der Zeit, Leipzig 1934.

(2) Die Schicksale Doktor Bürgers (Insel-Bücherei Nr. 334 1952) S. 61.

(3) Führung und Geleit. (Inesl-Verlag 1954) S. 158.

されやすい性格、結局 „Die Schicksale Doktor Bürgers“ は „Die Flucht“ の扉にあるごとく、病人、世間から見捨てられた人々への愛を彼の生活信条とし、その愛から出発し、人を治癒するということを彼の使命として感じているにもかかわらず、若き感情に呪縛され、医師と患者という関係を踏み越すことによって、患者であり、また彼の愛人でもある一人の女を殺してしまうという罪を犯すのである。

ここで男女間の愛としてとり扱われているのが、Bürger と Hanna Cornet との間の恋愛関係である。医師が患者と特殊な愛の領域に入るということがどのように危険なものであるかを、Bürger は次のようにいっている。

＜そうだ、私が Hanna の医師であることを知った時には、もう遅すぎるのではあるまいか。そんなことがあっていいものだろうか。私と彼女がはじめてくちづけをし、彼女が私に銀製の杯を贈ってくれた新年の夕べ以来、私は患者としての、たすけを必要としている人としての彼女のもとにきているのだということを忘れ去っていた。今朝まで忘れ去っていた。彼女の容態について、もはや何も話さなくなり、何の処法もしなければ、何の注意もしなくなっていた。＞⁽⁴⁾

上に述べたように、意識しながらもついに若さ故に恋の感情にうちまかされ、そしてついに彼女を死に導いてしまうのである。そして自己の罪の意識に耐えきれず自殺という自己逃避をなすのである。

前にも述べたように＜潜在的なあの没落によって現実の没落に一步先んじようと思った。＞⁽⁵⁾ といっていることに、Carossa は恋愛に対して、ことに医師としての自制を自己に強いたのである。

まず、„Die Schicksale Doktor Bürgers“ において Carossa は、男女間の愛における感情と理性、自我と自制の相剋、自己苦悩、それから衝動にのる男女間の愛が、いかにすべてを無に帰せしめる破壊現象と婚姻関係を結んでいるかをはっきり見極めたのである。

さらにこのことは、彼の晩年の作品 „Geheimnisse des reifen Lebens“ においても強調されている。

＜愛においては、自分を他人によって無に達するまで苦しみ抜くという病的慾望が忍び込む。かくして、弱い人にとって、愛はかつて戦争の地獄があったよりも、もっと息苦しい地獄になる。そこには、いかなる名誉のしるしも用意されていないところの裏切り、傷害、死、そして監禁が存在する。人間的なるものの暗い深淵への苦しくも深いまなざし、それがこのような戦からの唯一の獲得物である。＞⁽⁵⁾

即ち男女間の愛というものは、我々にとって何を意味するか、我々を何処に導いて行くものであるか、ということの一つの解答を提出しているのである。

„Die Schicksale Doktor Bürgers“ において、恋愛に健全な精神をむしろむろし

(4) Die Schicksale Doktor Bürgers. S. 35.

(5) Geheimnisse des reifen Lebens. (Insel-Verlag 1952) S. 113f.

い Dämon が住んでいるということ、すなわち、恋愛の暗い領域、危険を体験した彼は „Führung und Geleit“ において次のようにいっている。

＜無気味なものは決して最後の解決たり得ない、真実の源泉と治癒の源泉は相変らず恐怖の発生する場所におけるよりも幾層か深い所に発生する。……………暗黒の道は、つねに、まもなく終りに導かれる。光の神秘こそ測り知れざるものとして現われる。＞⁽⁶⁾

Goethe の „Werther“ にならって、Bürger が死んで Carossa が生きのこった、といわれているが、この „Die Schicksale Doktor Bürgers“ は、Carossa の精神発達史上きわめて大切な一時期を形成するものである。

II

„Die Schicksale Doktor Bürgers“ において、Bürger を破滅にまで追いやった Carossa ではあったが Doktor Bürger 時代にはっきり訣別し、確乎たる自己確立へむかってすすむ彼に決定的なる精神体験を与えたところのものは、自から軍医として志願従軍したあの第一次世界大戦の諸体験である。すなわち Carossa は、この時期において彼の感情と自我の優越を克服し、自制を獲得したと見ることができるのであり、その彼の思想の集大成として提出された作品が „Die Schicksale Doktor Bürgers“ の後十八年を経て発表された „Der Arzt Gion“ である。

この作品は彼が „Führung und Geleit“ において、＜あの頃私は或る女の患者のところに呼ばれて行った。その女の患者は、私が彼女を以前のどの人とも比較することができないほどに彼女の本質と態度によって特別に深く私の心を惹きつけたのだった。彼女が私の目の前にいると、いかに私が私の本当の意志から遠く自分を追いやっていったかということを、何日も私に強く感じさせてくれた。少女は絶望的な容態ではなかった、しかし比較的重患とみなされていた。しかし私は二、三度診察した後、この意見をすて、そして、ここにいる繊細な、仕事のために過労した人は、生に生き耐えてゆくために、二、三の看護を必要としているにすぎない。と確信した。私達は結婚して、田舎に移った。そして、それとともに、私の健康も回復していった。＞⁽¹⁾ といっているように、Carossa 自身の結婚の体験から生じた物語である、と推定されるのであるが、„Der Arzt Gion“ は、„Die Schicksale Doktor Bürgers“ に対する一つの解答である、ということができると思う。

物語の背景は、第一次大戦後の混乱したドイツであり、ここで問題になるのが Gion と Cynthia の関係である。

すなわち Cynthia は、僧院女学校を出たばかりのまだ心身ともに充分成長していない、悪性のインフルエンザからすっかり回復しておらず、病的なほど強い感受性もち、芸術にのみ自分を見いだそうとしている少女である。Gion はこの純粋ながゆえに、また脆さのある Cynthia を時代の受難と破壊から保護し、彼女を心身ともに健康

(6) Führung und Geleit S. 55.

(1) Führung und Geleit S. 38.

にし、そして結婚するのである。ここで Gion が Cynthia を愛する、ということは、Emerenz の通夜のとき、死の恐怖にかられて Gion の部屋に逃れて来た彼女が、みずからもとめた抱擁で失心するのであるが、この Cynthia の失心に遭遇したときの Gion の独白に明瞭に現われている。

くまあ、信頼するがよい、私はお前の中に、聖なるもろもろの姿を焼きつくすようなどんな火をもともさない、そのかわり、その聖なるもろもろの姿をくまなく照らしたすのだ。>⁽²⁾

すなわち „Die Schicksale Doktor Bürgers“ において、Bürger が Hanna Cornet を愛したところの、あの積極的な、はげしい、相手からすべてを求めるという、相手をも、自分をも焼きつくしてしまうような愛とは、遠くへだたっており、静かに、温く見守り育成しようという態度である。Bürger を精神的愛の敗北であるとみれば、Carossa は „Der Arzt Gion“ において、精神愛を獲得したとみることができるのである。Carossa は、Cynthia のアトリエを „Vorhof der Besinnung“ と呼んでいるが、この意味では „Die Schicksale Doktor Bürgers“ が Vorhof der Besinnung“ である。

また „Die Schicksale Doktor Bürgers“ を書いた当時を回顧して次のようにいっている。

く医師が自分の処法に多くの感情をまじえて、患者を自分に、或いは自分を患者の内心に依存させる場合、医師は患者の役にたたないという Doktor Bürger が知らなかったところのものを悟るために、私には多くの年月が必要であった。>⁽³⁾

さらに Carossa は、医師としての彼の信念を語っている。

く深く他人の中に生きながらその人達に帰属しないところの人間がある。しかも、真の医師はそうにあるべきだろう。もし彼が人を守り治癒すべきならば、彼は悲劇的な世界から遠ざかっていなければならない。>⁽⁴⁾

この医師と患者との関係にむける彼の信念を Carossa は、„Der Arzt Gion“ において Gion と Cynthia の関係にむけるのであり、Gion はこの信念をもって Cynthia 救済をなすのである。すなわちく単に以前の状態に復帰し、そして生の精神にいままでよりも、もっと強い生きようとする力が生じないような治癒は、治癒ではない。>⁽⁵⁾ という信念をもっている Gion は、Cynthia を救済する途は彼の愛による以外には存在しない、ということを知るとき、彼女の生きんとする力を自分の愛によって彼女にもたらしのである。ここに現われている彼の愛は、あくまでも彼の愛への自己奉仕であり、精神的愛である。恋愛がおちいりやすい所有せんとする愛を否定する立場にたつのであり、当然のこととして単なる血の愛を否定する立場をとるのである。

このことは、かつて彼の患者であった Diorna が Gion を誘惑する場面に明瞭にあら

(2) Der Arzt Gion. (Insel-Verlag 1956) S. 262

(3) Führung und Geleit S. 160

(4) Der Arzt Gion S. 190

(5) Der Arzt Gion S. 42

われている。ここで Diorna は Gion と対極をなす非精神的なる愛、肉体の愛にのみ生きる人間として描かれている。すなわち Gion は Diorna の愛を否定し、拒否するのである。

„Das Kind ist in den Liebenden verborgen,
Wie lichter Schnee in dunkler Wolke ruht.
Wir freuten uns der unverhofften Sorgen.
Wir grüßten fromm das Bild aus unserm Blut.“⁽⁶⁾

この意味で Emerenz も Sibylla を拒否するのである。

„Der Arzt Gion“ は、男女間の特殊な愛を人間普遍の愛、すなわち友愛にまで導き還元することによって、恋愛に崇高な意義をもたせる、ということに一つの生き方を提示しているのである。いいかえれば、男女二人だけの愛そのものが目的であり、排他的な傾向を持つ恋愛を避け、恋愛を人間相互への愛、友愛への一つの単位として男女間の愛を築こうというところに、„Der Arzt Gion“ の作製意図がうかがわれる。

ここで、危険な暗い愛に溺れやすい男女間の愛を、明るい健康な愛に育てる道は共通の目的をもつということである。それは „Ein Tag im Spätsommer 1947“ において Carossa が Martina に次のようにいわせていることから明らかにする。

＜人は何日でも、たえず実行したいと思う仕事を持たねばなりません。たとえ死んでからでも。＞⁽⁷⁾

このことは „Der Arzt Gion“ においては、Gion と Cynthia の結婚を相互の信頼の上になつた友愛の一単位として、彼等の共通の目的は、自分を犠牲にしてまで子供に生を授けようとするけなげな山の農婦 Emerenz の子 Johanna を育てるということ、戦争の犠牲者として子供ながら街で天体望遠鏡をのぞかせ、その金で老婆を養っている Toni を自分達のもとにひきとって健全に育てるということ、自分達の小さな社会を戦後の精神的荒廃から守り、さらにそれを少しずつ拡大することにおいて社会を健全にしようということにあるのである。

さらに Carossa は、男女の愛はどのようなものであるか、についていつている。

＜多分どの時代も、その時代が必要とするところの人間的結合を促進するのだらう。男と女の間の愛、それは戦争においても、平和な時におけると同様に、野にある草や花のように常に成長する。しかし、ゆるい寒さの場合には決して姿をみせないが、きびしい冬に我々の窓辺に緑豚木が来るように、非常に動揺している時代には突然新しい種類の盟約が生じるのである。そうだ、戦争より悪いものがおびやかし、伝統の要塞が動揺する時、そしてもはや血族関係が尊敬されず、故郷の地から焰が生ずるとき、その時偉大な友情が花開く。男と女は、彼等にとって彼等自身の情熱が全体の、すべての幸、不幸よりも重要になるほどに、しばしば危険に走ることがある。それに反して友情は、彼等自身の小

(6) Der Arzt Gion S. 246

(7) Ein Tag im Spätsommer 1947 (Insel-Verlag 1951) S. 321

さな運命の外で輝いている高い思想において栄えることができる。友情は世界に自分を開き、衝動にのる愛は孤立する。友情は厳肅なる女神 *Athene* の保護のもとにあり、友情は明るい勇気ある行為を促進する。友情の領域な僧院生活に似ている。そこでは天使の挨拶を聞くのに誰も他人さまたげないであろう。>⁽⁸⁾

ここで *Carossa* は、明るく強い友愛を暗い衝動的なる恋愛と対比し、友愛に優位を得させているが、彼はここで彼の人類愛という立場をはっきり示しているのである。

すなわち未来を信ずる *Carossa* にとっては、友愛に自分を捧げそれに奉仕することこそ明るい健全なる社会を建設することのできる唯一の途なのであり、友愛こそ愛の成熟せる生成なのである。

„Ein Tag im Spätsommer 1947“ において次のようにいっている。

<彼等 (*Kassian* と *Martina*) は体験した二つの戦争を思い出した。その二つの戦争は、彼等にとって単なる不幸よりももっと多くを意味したのであった。何故なら彼等は恐ろしい出来事の印象のもとでますます *geschwisterlich* になったのであった。>⁽⁹⁾

ここで夫婦の間を *geschwisterlich* といっていることは、*Carossa* の思想において注目すべきだと思う。

また

<二人の人間にとって一諸に寝ることよりも深い関係はなにも存在しない、と書いた熱狂者は一体誰なのか？ 昔の人々にとっては眠りは生の三分一以上を司っている神であった。……………これは、そっとしのび込んで来る紛れもない純粋な眠りの神であり、疲れた人達をそのつめたい雲のような家において保護するところの眠りの神であった。

しかしながら愛し合う男と女の間には別の種類の眠りが存在する。そこには眠りの神に先きだって他の神、容赦のない神が飛んで来る。その翼には嵐が住んでいる。そして、もっとも賢明な認識、もっとも正確な計算、もっとも神聖な聖歌、もっとも人に確信を与える言葉、もっとも神通力を持った呪文も不可能なところのもの——その獣のような陶醉がそれを可能ならしめる。この陶醉によって一つの新しい魂がこの世にやって来る。しかし、一体になった人達は実際一つになったのだろうか、あるいは再び離れ離れになりそして前よりも一層孤独になるために、すべてが弾力ある星のように、一つが他にたとびかかるのだろうか？ 数々の抱擁にもかかわらず二人は *Freund* でしかない、という方がもっと卒直ではないだろうか。>⁽¹⁰⁾

ここでいっている *Freund* も、また *geschwisterlich* も、両者ともに愛を普遍化した姿であり、人間関係において友愛に最高の地位を与える立場をとる *Carossa* においては、友愛より高い地位は存在せず、したがって夫婦の間も友人でしかない、というよりは、真の夫婦愛こそ友愛のきずなで強く結ばれる、と説くのであり、*Carossa* は精神

(8) *Geheimnisse des reifen Lebens* S. 113

(9) *Ein Tag im Spätsommer 1947* S. 338

(10) *Geheimnisse des reifen Lebens* S. 120

愛を血の愛を対比させるとき精神愛を優位にすえるのである。

III

愛の精神的面と肉体的面との対比において精神的を優位に置いた Carossa が、愛の肉体的面をどのように見たか、という問題がここにおこってくるのである。

＜我々すべての、より崇高な営みが、本来いかに危険なものであるか、いかにその護りが弱々しいものであるか、ということを彼は愕然として感ずるのである。……愛の息苦しい、生を生みだす領域は、死の領域と不断の神祕に充ちた交渉をもち続けることを私達は知っている。そして、この領域に近づいた人は贖罪を負うのである。この濁った空虚を埋めることは避け得ない職務になる。＞⁽¹⁾

更には

„Wer um die Wollust wirbt, erwirbt den Tod“⁽²⁾

上の引用からも明かなように＜生命を生みなす愛の領域＞即ち愛の肉体的面のみを求める人間は、＜死＞と対決せざるを得なくなるのであり、血の愛の領域は＜死＞と密接なる婚姻関係を結んでいるものである。即ち血の愛という肉体的なるものにのみ愛の存在を求める人間は現象的な＜生＞のみを肯定する結果となり、それにとりもなつて＜死＞の比重が強くなる。それは、とりもなおさず＜死＞に対する恐怖となって現われるのであり、形而下の世界への転落を意味するものである。この血の愛は男女二人だけの生活が目的であり、Carossaの説いている „die harmonischen Ordnungen der Menschheit“⁽³⁾ は失われねばならない。この代表的人間が Diorna であり、さらには Sibylla であり、Gion は Diorna を拒否し、Emerenz は Sibylla を否定するのである。

ここに Carossa は、男女間の愛の一つの解決策として子供をすえるのである。いいかえれば、男女間の愛は彼等の愛そのものが目的ではなく、人間生活続行の目的が彼の愛の中心点になるのである。すなわち愛の混乱から生ずる暗い感情からの逃避を、Carossa は二人の子供に見るのである。また人間生活続行の目的という面を強調すれば、Carossa の子供への信頼、未来信仰の思想に一致するのである。すなわち Carossa の強調する愛の領域にあっては、＜愛と死＞ではなく、＜愛と生＞が密接に接近するのであり、この代表的人間が Emerenz である。また Gion が Diorna を避けた時にくちずさんだ詩がそれを証明するものである。

„Das Kind ist in den Liebenden verborgen,
wie lichter Schnee in dunkler Wolke ruht.“⁽⁴⁾

更に逆説的にいえば

„O ungeborenes Liebes, weltlos ruhend !
Nun sollst auch du den irdischen Strahl durchheilen.“

-
- (1) Geheimnisse des reifen Lebens S. 121 f.
 - (2) Gesammelte Gedichte. (Insel-Verlag 1950) S. 86 „Mysterium der Liebe“
 - (3) Geheimnisse des reifen Lebens S. 121
 - (4) Der Arzt Gion S. 246

Einsamen Mann, einsames Weib, wer lenkte sie
 Zusammen ? Du. So kommst in unsere Menschenzeit.
 Urwissen ist in dir, und nicht belehr ich dich ;
 Nur sinnend möchte ich, wie du's vielleicht bewahren kannst,
 Im Hiersein, ich, dein Vater. “⁽⁵⁾

すなわちこの二つの詩は、精神的に愛する人達のみが子供を取立て生むことができる。そして子供が二人の男女をますます強く結びつける、という相互関係にたつのである。

ここに Carossa は愛の精神的面と肉体的なる面の調和を求めるのであり、男女間の精神的なる愛の究極の姿として性愛をおくのである。

„Liebe fordert letzte Beugung,
 Und ich trau dem dunklen Rufe.
 Noch im tiefen Graun der Zeugung
 Fühl ich Sehnsucht, ahn ich Stufe.

Einmal muß ich Welle werden,
 Muss im Rausch des Tiers zerfließen.
 Erst aus ganz gelösten Erden
 Kann der Stern zusammenschiessen.

Seele rast hinab zum Schosse ;
 Dort wird sie von Lust verschlungen.
 Auf den Geistern liegen grosse
 Glühende Verfinsterungen.

Dann verebnen unsre Schauer,
 Und ich darf zur Welt genesen.
 Wer gezeugt hat, fällt in Trauer,
 Aus der Trauer steigt das Wesen. “⁽⁶⁾

また詩 „Gruss“ がこの愛の究極なるものとしての精神と血の結合の崇高なる姿をうたっている。

„.....

(5) Gesammelte Gedichte S. 109 : Geheimnisse des reifen Lebens S. 232
 „An das Ungebohrne“

(6) Gesammelte Gedichte S. 84 „Von Lust zu Lust“

Einst werden wir im höchsten Eros münden

Und jedes andern Dämons leicht entraten :

Die letzte Tat prägt alle frühern Taten. ⁽⁷⁾

即ち、あくまでも精神愛を基盤とした血の愛であり、精神愛に基かない性愛を拒否するのである。精神愛と血の愛の調和から生まれる結晶を、Carossa は次のように表現している。

„Jetzt fängt sich Eros zu verkörpern an.“ ⁽⁸⁾

Carossa は、この精神愛と血の愛の調和に Eros という概念をもつてくる⁽⁹⁾、そして血の愛を Dämon という言葉で表現しているのであるが、精神愛と血の愛の調和した世界にあっては、「愛の暗い領域」、「もろもろの Dämon 住む領域」は克服されるのであり、ここには所有せんとする感情も、嫉妬の感情も姿を消すのであり、勿論この世界には前にも述べたように、＜死＞に対する恐怖も存在しないのである。このことは „Der Arzt Gion“ において、自分を犠牲にしてまで胎児に生を授けようとする素朴な農婦 Emerenz、さらには物語の経過において Cynthia が、Gion の精神的愛と助力とによって心身共に健全に成長し、最後に精神愛と血の愛の一致において二人の子供が生まれる、ということが証明するものである。これが Carossa の強調する Besinnung の境地にほかならないのであり、この Besinnung こそもろもろの恐ろしい姿となって現われる Dämon を打ち砕く力となるものである。

また „Geheimnisse des reifen Lebens“ において、Cordula と結婚している Angermann が、Barbara と血の交りを結ぶことによって Angermann が Cordula と、また Barbara も Sibylle と、さらには Cordula といままでよりも一層緊密に結びつくことができるという愛は倫理観を越脱したものであるが、ここで Carossa は、彼の精神愛の優位を主張するというよりも、むしろ精神愛が性愛を超越した姿で作用する力を象徴化したものであり、この作品においても Angermann と Barbara との間に生まれる子供を Sibylle と Cordula が育てることによって、この子供が彼等四人をますます深いきずなで結ぶのである。

即ち男女間の愛、しかも一見非倫理的なる愛、もろもろの Dämon が住んでいる領域に一步踏み込みながら、しかもここに嫉妬の感情も、憎しみの感情もなく、四人が、特に三人の女性達が自己を形成し合い、絶えず成長していく、という神秘的なる愛、精神的愛の象徴化された姿で表現されているのである。すなわちここでは男女二人だけの愛で

(7) Gesammelte Gedichte S. 75 „Gruss.“

(8) Gesammelte Gedichte S. 87 „Mysterium der Liebe“ (Carossa の愛の思想上極めて大切な詩であるが紙面の関係上割愛した。)

(9) (Mien Theissen は愛において死を否定するものとして Eros をもってくる。Erosこそ愛の有する神秘であり、Eros は愛と死を共にその中に包蔵し、Eros によつて、愛は絶対なる境地に到達する、と説いている。) Das Ich bei Rilke und Carossa Amsterdam 1935

はなく、同じ光の異った光彩のように、互に作用し合いながら輝きを増し、新たな生成へと向って発展する愛の過程が象徴化されているのである。

以上、主として Carossa の友愛と男女間の愛について述べてきたが、愛の問題で大きい比重を占めている＜愛＞と＜死＞に就いての詳細は後の機会にゆずりたいと思う。